
偽善者

ロイヤルストレートフラッシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽善者

【Nコード】

N4069K

【作者名】

ロイヤルストレートフラッシュ

【あらすじ】

オッス、オレ偽善者。最近知った事ですが、高校生ってストレスばっか溜まるもんなんですな。四六時中イライラしっぱなし。理由不明で手に負えませんよ。いわゆる思春期ってヤツでしょうか？

：うーん、違うような。じゃあ反抗期？

：答えになってないなあ。では何だ？

：オレが偽善者だからですかね。いやはや困ったもんだ。

1 昼間の虚ろい

11月2日午後3時ジャスト。

かなり遅い目覚め。

頭が酷く痛む。

フラフラと危ない足取りで立ち上がるが、案の定、床に置いてあつた教科書の束に躓く。身体が大きく横に傾き目の前にあつた本棚にアタック。

……。

痛い…。

うざりたい…。

床に倒れ込み、片手で目を覆う。

全てを塞いで、現実を見ないように。

暫くその状態にいる。

今日は休日でもなく祝日でもない。何かの特別な日でもなければ体調が悪い訳でもない。

つまりはサボリ。

悪く言ってもサボリ。

平日なのに学校に行かないのは、ただ行きたくないから。

別に、今日学校で体育祭があるからとかたたいまイジメに遭遇中だからとか、そんな大それた理由はない。

ただ、行きたくないだけ。

自分でもよくわからない。

たから勝手に面倒だからという理由にしとく。

「腹へった…。」

ゴロン、とめんどくさそうに起き上がり取り敢えずトイレに行く。

窓のそばを通ったが、その奥の景色には見向きもしなかった。

見れば余計に憂鬱になるだけだし…。

下の部屋に降りても、きっと誰もいないだろう。

どうせ、オレ以外は皆仕事なんだろ。

だから誰もいないんだな。

勝手な推理で納得する。

またいつもと変わらない1日が始まった。

どうしようもなくつまらない毎日の繰り返し。

1 続 昼間の虚ろい

下に降りる。

階段には山積みになった本やら漫画やらがあつて、ひどく通りにくかつた。

主に週刊少年ジャ○プ。薄くて無駄に面積がでかい。
階段の小さなスペースにはちよつと無理があるような気がする。

まあ置かなきゃいい話なんだけど・・・。

そう思いつつ階段の途中で立ち止まり、
山積みになった1番上の、多分最新刊であるジャ○プを1つ手に取る。

それを開き、大雑把に目を通す。

・・・。

やはり読んだ事がある。

もう1度、最初から目を通す。

.....。

何度やつても同じ結果しか出てこなかった。

ため息を1つ。そして階段に座り込み、上の窓から入ってきた夕日の光をボーッと眺めた。

なんとなーくだけど、夕日はオレを怒っているような気がした。

「バーカ、バーカ。おまえなんか・・・おまえなんか・・・」

幻聴だな。

夕日がしゃべる訳ないじゃないか。

アホらしい。

バカみてえーだ。

呟く。

グオオオオオ。

そういえば昨日の夜から何にも食べていない。

腹が、何か食べ物を・・・と助けを求めている。

腹を手で押さえて、誰もいないのに顔を赤くする。

なんか恥ずかしい。

大きく伸びをして、勢いよく立ちあがる。

今いる階段からもう1つ下の階段へと足を動かす。

頭を抱えて、腹を押さえながら。

1 続続 昼間の虚ろい

冷蔵庫を開け、中に入っている食べ物を確認する。

何も入っていない、だけでも一生懸命冷蔵庫内を探索する。

キョロキョロと見回して、奥に手を突っ込んでみたりして。

電源すら入っていない冷蔵庫の中身を探していた。

結果、食べ物なんてある訳なかった。

なんでこんなことしたのかさっぱり分からない。

どうしてだろう？

何がしたかったんだろう？

答えてくれる人は何処にもいないと気付くまで、オレはずっとその場に立ち尽くした。

腹が鳴る。

だが、食べ物はない。

それでも腹はしつこく鳴り続ける。

オレにどうしろってんだ？

腹に尋ねた。

返事のかわりに返ってきたのは、

ぐおおおおおお。

効果音のみだった。

仕方がないからパソコンでもしようと机に向かった。
パソコンはデスクトップ。移動は不可。

パソコンの前に座り、コンセントをさして電源を入れた。

たちあがるまでの時間する事もなかったので、玄関に配置されているペット用のケージに直行する。

飼っているのは三毛の猫。

当然[♀]。

何故ケージなのかは、後程。

猫は寝ているらしく、オレを出迎えてはくれなかった。

目を閉じて丸くなって寝ている猫。

近づいても、全く起きる気配無し。

暇だったのでとりあえずそれを眺めていることにした。

猫は幸せそうにぐっすりと眠っていた。

本当に、幸せそうに…。

オレも、寝たら幸せになるのかな？

こんな、ろくでもない場所から居なくなれるのかな？

オレも、寝ようかな？

そうこうしている内に、パソコンがたちあがった。

ただの暇潰し。

それ以上でもそれ以下でもない。

そのつもりだった。

そう思ってた。

何でもなかったんだ。

本当にただ暇潰しだったんだけどさ。

違ったんだなあ。

しみじみ思うよ。

なんでだろ？

……。

ワカンね。

この理解不能で意味不明なワードも。

ワカンねえなあ。

考えてることが、

理解できない。

どうして？

どうしてだ？

どうしてオレなんか……。

どうしてこんなオレなんか……。

偶然の出来事。

それは誰にも分からない。予期できない。

少年はたまたまパソコンをたちあげて、たまたまインターネットを開いて。

そしてたまたまメールボックスを覗いてしまった。

そこにあつたのは
1つのメール。

全然大丈夫じゃない。
全然平気じゃない。

だつてただのサボりだから。

平気とか以前の問題なのだから。

それなのに、お前は、

お前は…。

来たのはメール。

たった1つだけの手紙。

少年がそれを見ていた時の背中は、とても小さく、
けれどもとても大きかった。

送り主は、知らない。

少年がああメールでどれほど救われたかを。

送り主は、知らない。

少年がああメールで泣いていたことを。

行間 学校無意味理論その1

学校

それは年端もいかない子供達が社会にでていくにあたって必要最低限な知識を養い社会的に正しい人間を育て上げることが目的としている教育施設

だが、実際は理想とは程遠い。

原因の分からないイジメ。

一般的な学校には必ずと言っていいほどに蔓延る不良ども。

現実が見れなくなった不登校達。

やる気のない先生ら。

全てにおいて理想とは程遠い。

逆に悪い方向に一直線。

唯一の救いは、友達。

授業中とか休み時間とかに他愛もない会話ができる。

登校、あるいは下校にもそれらをすることができ。

有り体に言ってしまうえばそれらは普遍的な日常の一貫にすぎない。

よくよく考えてみれば、そのような簡単かつ普通すぎる行為、すなわち会話がしたいのなら態々学校に行ってまでする必要はこれっぽっちもない。

何のために学校に行くのだろうか

そう問われた時、友達と会話するためと答えられる人間が果たしているだろうか？

現在の学校の約30%ほどは、学校に来るための理由を勉強のためだと答える。

一見して妥当だと思う人もいるだろう。

確かに学校というものは勉学に励むべき場所であり将来のことを考えそのために通る通過地点である。

30%ほどの学生たちは、学校の存在意義を理解してそのことを正しくとらえているのだ。

では残りの70%はどうだろう。

いろいろな意見があるが、一番の理由は皆が行っているからという
ひどく単純なことなのだ。

皆が行くから自分も行く、皆がそこにいるから自分はそこにいく。

つまりは、他人に合わせているだけ。

自分で考え自分で判断し自分で行動する。

そついうのも学校での最終的な目標となっている中で、他人に合わせ
せているというのは矛盾している。

学校という教育すべき場所のはずなのに、もともとの目標である事
柄に対してまったくの逆効果になっているのだ。

学校とはそんな矛盾だらけの場所だったのだろうか？

そうだと仮定して、そんなものに存在する価値があるのだろうか？

そもそも学校なんて無駄をかき集めたようなものに通う意味が有るのだろうか？

2 オレとコイツ

中学一年生。

それは頭の悪い幼稚な集団の中から抜け出す事を意味し、少しでも大人の階段を昇ると言うことなのだ。実際は小学校のそれと何ら変わらないのだが、何しろ少し前までその幼稚な集団に属していたのでそこまで考える事は到底出来るはずもなく。

乏しい思考能力で考えた結果、中学というのは夢や希望に溢れているらしいのだが。

今になってみると、当時の自分はどうかしているレベルをはるかに超える超絶馬鹿だったとは思えない。

少なくともオレはそう思ってる。

そして今現在スランプ中。

「部活めんどいな…、サボろうかな…」

二年七組。

帰りのホームルームが終わってガヤガヤと騒がしい教室の中、水瀬^{みなせ}空^{そら}は一人呟く。

皆それぞれ部活動の場所へ移動しようとしているのだが、水瀬は椅

子に座ったままずっと俯いていた。

水瀬も他の学生のように、ちゃんとした部活に所属しているのだが、今日は気分の問題で行きたくない様だった。

水瀬は水泳部に所属している。だから、移動の際はプールへと向かわなければならぬのだが、困った事にこの学校にはプールという物が存在しない。よって学校のそばにある市民プールを利用しないと部活にならないのだった。

問題は、そのプールが数キロ先にあつて辿り着く前に体力の限界がきてしまうという事。

先生に言わせれば「それも含めて部活。いい年して数キロ歩くの辛いとか言ふな！」だそうだ。

何というか、理不尽だ…。

前に一度だけ、部員総出で顧問の先生に抗議したことがある。オレはその事にあまり関心がなかったのだが数合わせの為、仕方なく参加してやった。

抗議の内容は悲惨極まりない物だった。

最初こそ良かったものの、段々と先生の説教に変化していつて、拳げ句下校時間ギリギリまで聞かされる羽目に。

何でも、オレが先生の無茶苦茶な理論を聞いているうちに、つい「説得力の欠片もない…」と思つたままの感想を言ってしまったのが原因らしい。

……。

その時の皆の顔は、多分生涯忘れないだろう。
見せることができるなら、是非見てほしい。

忘れられないことは他にもあるのだが
その後起こった悲劇については敢えて語らないことにする。

そんな感じに部活にはいい思い出がないオレ。

最近はまだ部活に顔を出していない。

「…っはあ…。」

大きなため息をつく。

ガラガラ

「キモ。じじいかお前。」

教室のドアが開き気になって振り向くと同時に、容赦ない言葉がオレの胸に突き刺さる。

…いきなりキモってどうなのよ？
軽くへこむんだけどなあ。

「……」

「で、お前はまたサボろうとしてる訳だ」

「…（ギクッ！）…」

「凶星だな？」

どうやらこいつはオレの心が読めるらしい。勿論そんな能力は持ち合わせてないのは知ってる。

「お前の行動パターンは分かりやす過ぎなんだよ。考えなくても大体は分かる。」

「…。オレは単細胞生物かよ…」

「みたいなもんだろ？」

「お前の目は節穴か？」

半分、いや三分の二以上本気でそう思う。

いい眼科知ってるからあとで紹介してやろう。

「は？何語？」

疑問を疑問形で返すな。と思った今日この頃。

「…日本語…」

律儀答える阿呆がここに居る。

「ゴメン、オレの分かる言語で喋ってくれる？」

「…あの「ニホンゴ、ワカリマスケア？」……。だか「アナタノコトバ、ワツカリマセン」……。えっと「ホワツトウドウユーセエイ？」……。」

…ヤベ、泣きそ。

「あはは。ゴメンゴメンって。お前ってからかい易いしさ、それに、オレはね、嬉しくなるとついやっちゃうんだよ」

嬉しくなっちゃうとついオレを罵倒するらしい超ドSの新生怒<sup>ドナルドニ
コタイプ</sup>鳴瑠怒さんは、オレの席に向かってテクテクと歩きながらそう仰りやがった。

（そのうちハンバーガー4個分喰らわせてやる。ポテト付きで。）

思うだけで口には出さなかった。
かわりに、

「…オレはドナルドより、カーネル派だ」

心底どうでもいい情報を提供する。

ちなみに、本人曰くこれだけは絶対に譲れないそうだ。

「…ゴメン。違いがサッパリ分からない。共通点しか思い浮かばない。ていうかどうでもいい。」

思いつきりぶつちやけちゃう。

コイツの感性は原点から正す必要があるらしい、などと空の将来の事を考えつつ哀れみの眼差しを向ける。

「…そんな目でオレを視るな。何か、その。は、恥ずかしいから…」

一回死んでもらおうと、無言で椅子を持ち上げる。

その顔は、夜叉の如く冷徹で目からは言い知れぬ畏れが漂っていた。正直、人が変わっていた。

「ちょ、ちょっと！？冗談に決まっているのに何で本気にすんだ！？」

「えっ？…なんだあゝ。冗談だったんだあゝ（棒読み）」

驚く、驚愕、目が飛び出る、みたいなコミカルな表現は一切なく、むしろ分かっていたけど敢えてやめない感が全身からありありと伝わってきた。

冗談だと言われなければそのまま殺しかねなかったかもしれない。

…コイツ、本当にオレの友達ですかッ！？

椅子を降ろして、元の位置に戻す。

そしてしばしの沈黙。

よくあることだ。

何故かアイツとの話しを終えると、急にアイツは黙ってしまう。理由は不明。

コイツとコントじみたやり取りを終えると必ずその後を訪れる沈黙は、オレ的には嫌いじゃない。
アイツはどうだか知らないが。

……………。

2人して外を眺める。
ボーっと。
ただただ、ボーっと。

すると、唐突に口を開く。

「お前って意味分かんねえ。別に嫌って訳じゃないのに何でサボろうとすんだ？バカじゃねえの？」

「何でいきなり話変わってんだよ？」

「いいから答えろよ」

何なんだろうなとは思っけど、コイツとつるんでいるとこの様な事は頻繁に発生しているので、もう慣れた。

…まったく。

そっぴやそっぴやだったな。

いつも唐突に現れ嫌味のマシンガン、そして勝手にアドバイスして気が付いたら居なくなる。そんな友達。

桐野日向は、昔からの変な友達だった。
きりのひゅうが

オレは曖昧に答えた。

「なんとなく、かな？」

「…。」

「……っはああ。お前は何やつてもお前なんだな。よく分かったよ。」

オレの目の前にある机に腰を掛けオレの頭を連続チョップしながら訳のわからない言葉を浴びせる。

「…何でそこでチョップがでるんだ…」

聞こえないように呟いた。

気が付けば、教室にはオレ達以外、誰もいなかった。

バシバシと頭を叩く音が響く教室は、橙色に染まった夕日に照らされ同じ色に変色し

窓からは、部活動による声で埋まっていた。

2 オレとあの人

「ねえ？君はどう思うっ？」

……。

……。

……。

いきなりそんな事聞かれても……。

つか何を思えばいいのかすら分らないんッスけど。

「もう！ちゃんと話聞いてたのっ！」

いや、聞いてたとかいう以前にあなたに会ったあたりから記憶がさっぱりございませぬ。

「……………。この歳で、アルツハイマー……………?」

いやいや。

そんな神妙そうな顔でいわれても困る。

ていうか、そんな憐れむような眼でそろそろと距離を離さないでほしい。

マジで泣きそうだから。

「嘘に決まってるじゃん。冗談もわからないの?」

じゃあなんで距離が開いたままなのかと君に問いかけたんですけど。

「明日の話をしてたんだって!」

あ、シカトっすか…。

「で、どうすんの？明日」

明日。

意味、今日の次の日の事を指す。

英語でTOMORROW。

その他の言語は書きません。

語源は、確か……………。

「そんな事聞いてないんだけど。」

百も承知です。

「真面目に考えてよ！結構煮詰まってるんだからさあ！」

はて？

何の事やら？

私には関係ありませんです。はい。

「おい。逃げんじゃねえよ。」

ちい。

スタンディングスタートをしたのが致命傷だったみたいだ。

やはりクラウチングのほうが回避率が高かったようだな。

肝に銘じておこう。

「勝手に肝に銘じるな。」

彼女は威嚇のつもりなのか、犬歯を剥き出しにし声のトーンをできるだけ抑えている。

いや。

決して怖いとかじゃないぞ。うん。

単に生命の危機を感じてるだけだ。

多分、ひい、なんて叫んだ日にゃ自分の席に花を飾られる事になる
だろな。

なので話題を強引にチェンジ。

「で、明日なんかあんのか？」

「知らないの!？」

「今までの会話で察しろよ」

「それをいうならアンタこそ今までの会話で察しろよ」

はい、そうですね、ごもつともです。

「だーからあ、明日の文化祭についてでしょー!」

「?」

ぶ・ん・か・さ・い?

何だそれ？

ブンカサイ
文葛西っていう人の事かな？

という事は、その人の誕生日か何かなのだろう。

そおか。

なるほど。

こいつは誕生日プレゼントを選らんでもらおうという魂胆だなあ？

見えたぞ見えたぞ見えたぞおお！

「誰よ文葛西って。アンタ、冗談じゃすまないくらい、頭どうかし

てるわよ」

うるせい。

ただの現実逃避じゃわい。

そういえば、俺は帰りの途中で誰かに呼び止められて……
……

2 オレとあの人 回想バージョン1

帰り道。

いつもと変わらない土手の河原沿いにある、人口密度が極端に過疎化してしまっている小さな脇道。

今はオレ以外に誰もいない。

河原には野球小僧やサッカー少年の坩堝になっており、散歩中のご老人方のいい迷惑な状況である。

「若いもんは元気だねえ。全く、イライラしてしょうがねえ」

「すとらいく、つう！」とかいう、おそらくガキの一人が叫んだと思われるバカでかい声が聞こえた。

それと同時に、サッカーボールを蹴る時になるパシンツという音も辺りに響いた。

「野球プラスサッカーって、一体どんだけスペースあんだよこの河原は…。昔はそんななかったはずだぞ…」

周りには眺めている観客、というか休日でもないのにでギャラリーは元々少ないのだが、その少ないギャラリーすらもいなくなっており、もう夕焼けが半分ほど沈みかけているのにも関わらずガキどもは元気よく河原中を駆けまわっているのが見なくても声だけで分かった。

よくは覚えていないが、オレもここではかなりの回数で遊んだ気がする。

昔、今のガキどものように全く何も考えずに遅くまで遊び回っていたなあ。

ただ目の前にある楽しい事や興味のある事だけを追いかけていたあの頃は本当に良かった、という記憶が今になっても残っている。それも鮮明にな。

ホント、楽しかったよなあ、あの日は。その後、帰りが遅すぎて親にこっぴどく叱られたけど。

中学に入学しても、ここだけは必ず通る道になってしまっていたいや、なってしまったんじゃないかって自分で通りたかっただけっていう方が正しいかも。

登校している時も、部活帰りも、初めて部活をサボった日も、ケン力で負けた日も。

ここだけは、絶対に通過していたんだ。

何回ここを通ったことだろう。数えたってきりがなくらい通ってる。

これからも続くんだろうな、こんな道が。

……なんてカッコつけて黄昏ていたら、後ろから自転車の錆びた

ペダルをこぐ雑音が聞こえた。

普段ここを通っている奴はオレ以外にいないと思っていたので、不思議に思い振り返った。

大方、買い物し過ぎて手には持ちきれなくなつた荷物を仕方なく自転車のカゴに詰め込みえつちらほつちら帰路に着く専業主婦かその類いの何かだろうしかしにしては軽快なスピードだなあどうしてだろう？とか考えた時点で、オレの密かなカッコつけは木端微塵に碎かれる運命にあつたのだろう。

實際何があつたかというところやもうかあいい女の子が「あ、危ない！そこ、どいてえええ！！」と叫んで物理的ダメージを代償にパンチイベントに遭遇したのだった。

…と思つた奴はギャルゲーのやり過ぎまたは夢の見すぎだ。そんな簡単にイベント発生するのなら、彼女が一切出来ない男の希少価値に勝る紙幣はこの世には存在しなくなることだろうな。

オレの場合、物理的ダメージには必然的に伴うはずのパンチイベントだけがすっぽりと省略され、代わりに見事な放物線を描いてダイレクトに顔面スライディングするバッドエンドを迎えたというだけだ。

結論をいうとオレはとっても悲しかった。

アタックしてきた彼女、シワスサツキ師走皐は、自分から当たつたという謝罪の言葉は一言もなく、記念すべき第一声は

「バカじゃないの？」

であり、手を腰にあて仰向けに倒れているオレを慈悲浅く軽蔑の眼差しで見つめていたのだった。

一応クラスは一緒だったから初対面ではないものの、コイツと喋ったのは実質これが初である。

それもそのはず。何しろコイツ、相当な美人なんだからな。近付きがたい事この上ない。今だって、コイツは腰に手をあてているんだが、それがもう果てしなく似合っているのだから救いようがない。腰に手をあてるといふ行為がこれほどまでに似合う奴を、オレは今までに見たことがないくらいだ。

伸ばしているらしい癖のない黒髪に、パツチリとした薄緑色の瞳、サイドに申し訳程度に結わえられている髪なんか可愛らしいとしか形容できない。何かもう全てにおいて神々しい奴だなあ。

とか何とか考えていると師走さんは

「話があるんだけど…」

と恥じらい始めていた。

うわ、めっちゃ可愛い。オレはゴロンと起き上がって砂のついた裾とかを払い、ボサボサの髪を丁寧に整え、身だしなみの最終チェックを終えて

「何でしょうか？師走さん」

紳士ぶった。

だってアレだぜ？ここでカッコよく決めないで、いつカッコつけんだよ。人間、誰も第一印象が肝心なんだよ。

「あのさ…。非常に言いづらいんだけどさ…」

お？

これは、もしかしてもしかするともしかするかもしれない！とか

考えてると

「桐野君の事だけどさ……。アンタ、桐野君と結構仲いいよね？だから、ちよつと手伝って欲しい、んだけど……」

最後らへんは声が小さくて良く聞き取れなかったオレだが、最初の桐野とかいう単語を聞いた直後から、オレはぶっ飛んだカバンの在処を探す事に専念していた。

「わ、私との、仲を取り持って、ほ、ほ、ゴニョゴニョゴニョ」

師走は目を合わせていなかったから、オレが全く聞いていない事に気付かない。不覚にもカバンはガキ達の方へ飛んで行っていて、取りに行くのに一悶着ありそうな雰囲気だった。

オレは、恥じらっている美少女もとい悪趣味バカを無視して河原へと足を運ぶ。あんな悪趣味ヤロウに敬語を使っていたなんて、我ながら笑えない冗談だ。

アイツだって、女の子。

恋だつてするだろうさ。例え、どんなに可愛karうとも、どんなにモテようともな。

痛感させられたぜ全くよお。

「お、お礼はちゃんとするからさ！だから、お願いっ！」

空中に向かつて懇願してる。新手の新興宗教にでも嵌まったか？オレは、ガキどもに盗られたマイバッグを取り返すべく一人また一人と処刑しつつ、遠目に見ても分かるくらい緊張している師走を見ていた。

「何でも奢ってあげるしさ、ね？いいでしょ？……ってアレ？」

カバン奪還に成功したオレは、いい加減師走の話にも飽きたのでとつと帰ろうとしたが、残念ながら気付かれてしまった。

「ちよつと！何してんよっ！？」

叫んで追いかけてきやがった。周りからの白い視線が容赦なくオレに突き刺さっているとも知らずに。ちよつとその奥さん。何か勘違いしてません？

はあ。仕方ない、対応してやるか。

「何って帰宅するだけ、だけど？」

「言い訳は後で聞くから、取り敢えず止まれ！」

彼女はそう言って、オレの下まで走ってきた。待つてやる義理はないが、やはり世間体というものがありましたですね。待たないといけない雰囲気なんだよ。

「で、何？」

「話聞いてたのっ！？」

いや聞いてなかった、なんて言えねえよなあ。それにしてもコイツ、怒った顔も可愛いなんて反則だろう？

「いや、まあ、聞いてたっちゃ聞いてたけど…。」

「どうなのよ！」

「どうって……」

オレに、貴女の恋愛成就を祈願しろ？ そんなのごめんこうむる。

まあ冗談だが。

「つまり、手伝え、と？」

「……。…うん」

彼女は静かに頷いた。

多分、彼女の頬が若干赤いのは夕日のせいだけではないなと思った。

オレは頭をガシガシと掻いた。
決して痒いからではないぞ？

「……はあ。別にいい、けどさ」

彼女の目から零れ落ちそうなモノには、オレもズイブンとご無沙汰だったからな。

不本意ではあるが致し方あるまい。

結局、美少女を泣かせるなんて事はオレには出来ないのだ。

全く、お人好しだね。オレ。

そついう答えを貰えるとは思ってなかったのか、彼女は一瞬。力
ンと口を開けて呆然としていた。

かなりレアな光景だったぜ？

2 オレとあの人 回想バージョン2

「ほ、ほ、ほほほほ、本当に！ ガチでマジで本気で言ってるよね！？ 嘘とかだったら殺すよ、前言撤回で冗談でした」とか言っても殺すから！ ガチだよ、ガチガチのマジだよ！？」

……おいおいおい。

いくらオレが精神的にアダルトイックで経験豊富な（脳内オンリー）ジェントルマン（気取り）だからって、今をトキメク花の女子高生が鼻息荒くいかにも興奮気味な感じで眼前にまで詰め寄られちゃうと、さすがに一男性としての正常な機能もとい本能という名の別人格が覚醒しちゃいますよ？ いいんですね？ いいですよ？（ハアハア）。ボクちゃんビーストモードに突入しまっすっ！

と思ったらなんだか負けな気がしたし、口に出すほどオレは人間捨ててない。

まあここは無難な対処が好ましい、のかな？

いや、決して好感度上昇を狙っている訳ではないんで悪しからず。

「ガチガチのマジで。こんなところでオレ、殺されても困るし」

「ほんつつとおおうに嘘じゃあないんだね！？ からかってたら冗談抜きで閻魔ガイドの地獄巡りツアーにご招待するから！ ついでに途中放棄も同罪なんだよっ！」

皆さん。

こういう事を顔を真っ赤っかにした美少女が言っても、あなたは許せますか？

……………。

ちなみにオレは余裕で許容範囲だゾッ。（笑いたきゃ笑え、むしろ笑わないほうがおかしい）

とか何とか思っている反面、オレの頭は結局どうしたもんかとウンウン悩ませている訳で。

彼女の手伝いってのはうちの学校ではもう神の所業に等しき事象である。彼女に声掛けられただけで卒倒する奴もいなくはない。それほど彼女には人気があるって事だ。

風の噂で一部の生徒内では公式ファンクラブまで増設されたんだとか。

活動を目撃した暇人Aによる証言。

「新手の新興宗教なのか……！？」

活動に参加した変人Bによる告白。

「む、無理だ。オレには理解、出来ない……！」

カツ丼に盛り付けられた人参Cによる感想。

「ザ・斬新」

そんな感じだった。

カツ井に人參とは中々に味な真似をしよる。ザ・斬新。

という訳で現実問題、仮にもそんなもんが偶然にもこんなオレに
転がり込んで来たんだから、当然おけーと言わざる得ない。それが
我が校における暗黙のルールであったり。

しかしこの場合は例外である。内容が内容だしな。

だってこのお方、自分の恋路を手伝えとおっしゃりやがるんだぜ？
しかも何故オレに？

アイツの親友だからか？

それってどうなのよ？

ねえ、奥さん？

やはり、断った方がよろしいんじゃない？

やはりそうですか。

そうですよ。はい。

よっしゃ。

これだけの事をわずか数秒間で思考したオレは、多少の罪悪感を
感じつつも拒否の意図を示すために、改めてはた迷惑な美少女に顔

を向ける。

見ると、なんだか夕日のバックがクソみたいに映える笑顔が四方八方目掛けてそれを輝かせているキラキラ星的なものを振り撒きながら臆面もなく咲きほこっていた。

うん。

眩しいです。

直視出来ません。

誰か、サンバイザーをくれ。

「ヤッターヤッターヤッターマーンッ！、ううん、きゃっほーい！」

………とてもじゃないけど断りきれ自信がなかった。つか、断れねえ。

「…あのー、師走さん？」

「いえーいえーいえーい、わたし今、空飛べる気がする！　くるっくー」

ピョンピョンと跳び跳ねかねない勢いで両手をまるで翼をはためかすように上下運動し、そのまま下の土手に向かって走り去ろうとする。ちなみに、くるっくーというのは鶏の鳴き真似らしい。いや似てないがね。っーか鶏はめったに飛ばないからね。羽根はためかせないからね。

「もしもーし、しわっさーん。無意味な挑戦してないでこっち戻ってこーい」

「ハイヤあーどーどー（なんの掛け声だ）。…ん？ なんだい心の友よっ」

「誰かのび太だ、じゃなくて」

神に誓って万年0点は取っていない。

「いーじゃないのよ、っーれないねー。あたくち、のびちゃんをそんな子に育てた覚えはないのになあ」

「育てられた覚えはございません。ていうかいい加減Dえもんネタから離れろ」

しわっさんになら育てられてもいいむしろ育てられたいと思ったのは、きつとこのノリのせいだと思いたい。きつと、将来のこの娘の子は愉快的な性格に育つんだろっうなあー。いや育てられるんだろっうなあー、強制的に。

……。
……。

あまりに現実を見れなさすぎて意識が変な方向に跳びかけた。若干、夢見心地っぽいのが逆に危うさを強調している。

パチンパチン。

おい起きろ、これは夢じゃないぞ。ちゃんと痛覚機能してるぞ。名残惜しいとか思ってたんじゃないぞオレ。と、お決まりのセリフはもちろん脳内で楽しみました。

……ハッ！

何なんだこのノリ。

師走さん発の不思議ちゃん電波がこちらに移りやがった。空気感染とか、なにもんだよ師走さん。

というか、たった今師走さんへのイメージが完膚無きまでに壊れたぞ。

あたくちって何だあたくちって。ガキかテメーは（ガキも言わない）。

……ハッ！ って無限ループじゃねえか。

まあ、いいや。

で、師走さんってもつと文武両道質実剛健切磋琢磨な超人類で異次元世界の住民だと思ってたのに。…偏見どころか喋った事すらないけどな！

「ふっ、お主やりよる……！ さすが桐野くんの親友だけはあるね。才能盛りだくさんだよっ」

ねえよんなもん。

もしあつてもそんな才能こつちから願ひ下げだ。
今時芸人なんて、夢の見すぎで盲目になったファンタジー頭の最先端とは思えんね。

…ん？ これ芸人に対しての冒瀆にならない？
どうでもいいのでさっさと話の修正、修正つと。芸人さん、とりあえずごめんあそばせ？

「で、戻すよ」

「戻すの？」

「戻すの」

「戻しちゃうの？」

「戻しちゃうの」

「戻しちやいます？」

「戻しちやいます！」

まあ、楽しいやり取りですこと。

「助けてみなえもん、水瀬くんが話を戻しちゃっよ」

「みなえもんこと水瀬くんはとりあえず、貴女の言う人物は同一ですよとツツコンでおく」

「おーい、みな太あ野球しようぜー」

「みな太こと水瀬くんはとりあえず、それ関連の会話は極力というか極限に慎みたまえと脅迫しておく」

果てしなく無駄な気がするけど、やはり男なら当たって砕ける。何事もやってみなきゃ始まらないし、やらなきゃいつまで立っても状況は好転しない。

この場合に関してのみ言うなら悪化の道を辿りそうだとは敢えて追記しない。

女性に一睨みとはやや躊躇いを憶えるも、オレはこの異空間からの脱出を試みるべく師走さんに威嚇的眼差しをくれてやる。うざいやツにはガンツケ、これ常識。よゐこは女性に対してやらないように。

「そんなえつちな目したって、絶対脱がないよ」

「反応が意外すぎる！　そしてえつちな目など断じてしておりませ

んっ！ ついでにあんたそういう冗談も言えたんですね！」

おっどろきー。

「いやぁー、みな太さんのえっち！」

「……………真似しても可愛くない（真っ赤な嘘です）。つか、どくさいスイッチが入ったら真っ先に消されるタイプだよ、特に今に師走さんは」

「なんだとっ、みな太のくせに生意気だ！」

「ここでまさかの剛田主義っ！？」

「業界ではジャイアニズム主義と呼称されているっ」

「どうでもいい豆知識をありがとう。そしてそろそろ本題に戻りたい」

「みなえもんみなえもんみなえもん。水瀬くんが会話を打ち切ろうとするよー、うわーんうわーん（棒読み全開）」

しっつつけえー！

やったら、しっけー！

なになんなの、さっきのDえもん会話にそこまでしわっさんを引き寄せる要素あったの！？ ジャイアニズム主義って何！？ 業界って！？ ノリでどくさいスイッチ織り込むんじゃないかった！

つかDえもん、どんだけ師走需要受けてんだよ！ 藤子・F・不二雄ファンとか今時高校生じゃレア度高めなんだよ！ 絶滅危惧種か！

ああ、もっつ！

何なんだこの人！

「一応、女子高生に分類されておりますぞ、軍曹殿」

「そこ読んじやいけないとこ読んでますよ。あとあんた精神が完全に女子高生じゃないから」

完全に酔ったオヤジ並みのノリの師走さん。

大声を張り上げてるうちにそこら一帯が自分から出た二酸化炭素で満載になってるかと思うと、地球温暖化に加担した気がして居たたまれなくなった。

こんなテンション相手に拒絶の姿勢を示すのは難解困難極まる、ような気がする。こっちの精神がもたないのも、当然理由の一つ。

誰か、この方の止める方法を書いた説明書的なものを発行してくれ。全財産使っても買ってやんよ。

「はあああ、じゃもういいですよ、手伝えばいいんでしょ手伝えば」

もう、やけくそじゃーい。

あーもーホントめんどい。

「うん、それでよろしい」

オレ一言も嫌です発言してないのに何でこの人こんな物腰なんでしょう。人の心読めんのか。あんたサイコメトラーなのかしわっさん？　ますます意味わからん。

「そしてなのですよ、手伝うに当たって多々守って頂かなければならない事があります。どうゆうあんだーすたあん？」

「……………」

一タツツコむのが面倒になってきたので頷くだけで先を促すオレはまさしく苦労人。逐一ツツコんでいたら精神的疲労が半端ない。鬱になりそー。がんばれオレ！　負けるなオレ！

「どうーゆうーあうんだあーすたあーん？」

強調表現がこんなにもウザかったなんて今まで知らなかったよ師

走さん。

参考になるぜ。

「わかったわかった。わかったから、耳元で息を吹きかけるように囁くな。むずむずするから！」

むずむず訂正？むらむら正解。
んな訳あるか。

「いいじゃん別」

「良くない絶対」

誤解するから。

「ケチ。けちんぼは貧乏の始まりなんだからね」

「けちんぼ訂正？嘘つき正解、貧乏訂正？泥棒正解。学校で何を学習してんだ」

そして謎のしっくり感。
間違い、だよな？

「閑話休題」

自分で言うな。

と思った人はツツコミの才能はない。たぶん。

「で、その注意事項って？」

「ぶっちゃけ失敗したら君の命ないよ。ミッションインポッシブル
ッ！」

彼女はそう言って肩に提げていた鞆のチャックを開け、中から片手サイズの金属の塊をオレに向ける。そして内臓されし鉛球を……
……。みたいな展開のはずもなく、ただ淡々とした口調で失敗した暁の旨を告げる。

何が怖いってその本気で殺りかねん感じの殺人者の如く冷徹な瞳がマジでチビりもん。不覚にもぶるっちゃまったぜ。

まあ半分以上はうそだけど。主に後半部分。

あと、それじゃオレの命は絶対になくなるから。

「冗談は顔だけにしてよホントに。それって自己中すぎるだろ。冗談にしてもさすがに度が過ぎすぎ」

「うーん、やっぱそうだよな。さっきのはジョークだけだよ」

彼女はそう言つて、テヘへと頭を掻きながら苦笑いを浮かべる。
オレはというと、さっきとはうってかわつた反応にやや面喰らつていた。顔に出てなきやいいけど。

「真面目な話、失敗したらそれくらい的事君にしそうなんだよね、お門違いってのはわかつていてもさ。有り体に言つとやつあたりつてヤツだよ。半分ジョークだけど、半分は的得てる。要はやつあたりするかもだけど、それも含めていいかつて聞けるのだつ」

途中から恥ずかしくなつたのか早口で言い終えると、彼女は俯いてしまつた。

「なるほどね」

承知したぜ。

「それでも、いいかな？」

潤んだ瞳の上目遣いで若干の紅潮具合な頬をオレに向けてくる。
わかつてはいても、あらぬ二次的妄想が身体中、主に脳ミソの一部分と下半身やや上あたりを支配してしまう。つまり勘違いしてしまふ。いそうなのだ。

さらにこの人はオレの儚い希望を粉々に粉碎するかのよう悪魔

的なその笑顔で懇願し続ける。

この人自覚あんなのかね？

あつたらタチ悪いなあ。

さて、どうすつかな。

「……………」

「どう、かな？」

「……………」

「…………えつ、と」

「……………いい
よ」

どうでもいいけどオレに断る理由はなかったりする今日この頃なオレである。というか断れない理由はあつたりする。ややこしや。

「嘘じゃないよねっ嘘じゃないよねっ嘘じゃないよねっ！？ 黙っちゃってるからOKって受け取っちゃうよ？ いいねいいよね、はいもうキャンセル不可あー。裏ルートでキャンセル可あ、ただしキャンセル待ち6億光年先でえす。つって！」

ぐはっ。

態度豹変が著しく激しいよ、しわっさーん！

ヒットポイント12くらいのレベル1に対していきなりラスボスの最終奥義発動とはエグすぎ。もはや人間の所業とは思えない残酷っぷり。

頼むから、オレのセンチメンタルハートを粉微塵にすんな！
ていうか、オレの理性を吹っ飛ばしてどうする！

一言物申したい衝動に駆られるが、例によって思春期真っ盛りの恋する美少女はその細い小首を30度前後傾け顔面全体からキラキラ的な何かを振り撒き、今度こそオレを完全必殺。

大脳小脳海馬から前頭葉まで一気に血液上昇中！！ 頭のネジに
高速回転ドライバーが急接近！！

身体核爆弾の誤作動により、ボボーンて、ボボボーンて。オレの
五臓六腑、焼け野原。

なんて誇張表現の過度な乱用をしつつ大した期待もしないままに、
オレは躓きそうになりながらも彼女に手を引かれていく。なんでだ。

「そうと決まったら早速作戦会議つ。急がばぶち抜け！ だよ！」

直線的な彼女にはぴったりの造語ですね。

そうやってオレことみなえも……げふんげふん、水瀬くんは学園アイドルと摩訶不思議な関係を持つ事になったのである。ごしゅーしょーさまー。

——あとで気付いたのだけど、この事に関して本当の事を言う
と正直どうにでもなってしまうと思っていたらしい。

かと言って、彼女と腐れ縁が結び付くことに賛同している訳でもない。

第一、それほどイケメンでない腐れ縁に先を越されるのは癪というか逆鱗タッチというかカットざ堪忍袋というか………うん、そうだ、ム力つくんだ。

この際相手が美人だろうが凡人だろうが人参だろうが気にしない。

腐れ縁に彼女が出来る不祥事に対して猛烈に異議を唱えたいのだ。というか意義のなさを唱え回りたいのだ。うーむ、歩く恨み製造機も中々に魅力的ではあるなあ。いや、丁重にお断りするが。

さて。

青春には特有の産物である不満や不服を当たる人もいないので仕方なしに我が身で妥協し終わった。

ので、整理してみよう。

学年アイドルへの手伝いは、恋愛成就。
さらに、お相手さんは腐れ縁のダチ。

……要約すると実に簡素な内容であるね。

事の始まりから早急に切り出して迅速な伝達を行って欲しかったよ師走さん。

そこでちよつと想像。

イフ版オレとあの人回想バージョン？。

『ある日の暮れ方。僕は普段から使用している道に海拔1ミリ以下の浅い感慨を受けながら、暇を持て余しつつ帰路に着いていた。「僕は自慢じゃないがかなり器用な方だと思う」自分で言うのもなんだがな。そうしているといきなり顔面が地面を擦りガガガア、と摩られるような気がして予想は的中した。感想、痛かった。犯人は僕と挨拶代わりに一言二言交えて、本題と言う名の爆弾を投下した。もちろん被害者は僕のみ。「恋路手伝え」「遠慮したい所存」「恋路手伝え」「遠慮したい」「恋路手伝え」「遠慮」「恋路手伝え」「……」「恋路手伝え」はいイエス。それから喜んだ彼女は日本語に非常に酷似している謎言語で僕と会話し（何故か通じた）、愉快な厄介事を背負い込みました。まる。いやオレ的に、ばっつ』

うん。

序盤のオレはただの変態で、師走さんは平成のバスジャック犯。何処をどう直しゃ元通りになるんだ。人類至上最大の課題である。

「ハアアあアあアあアあ」

ホントに。

厄介事背負ったなあ。

困ったもんだの大問題。骨折り損のくたびれ儲け臭がプンプン。

でも。

「春日部防衛隊ふあいあー！」

彼女は笑ってる。

だから、いつか。

日の出数瞬前の河原を疾走するオレらは何が悲しいのか、バカッ

ブル扱いされて非難の視線を頂戴した。

頬に当たる風が季節外れにも妙な冷たさを兼ね備え、世の中の世知辛さを示しているみたいだった。

嬉しくねーぞ。

コノヤロー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4069k/>

偽善者

2011年6月9日16時05分発行